

コラム46: 2015 私の農業 (2015・10・26)

私の5年目のイチゴ栽培が今年も始まりました。9月8日に購入苗 633 株の定植を無事に終え、残りの 300 株位はランナー苗を挿すことでやっていきます。昨年は、自家苗を病害により全滅させた上、私の足のトラブルと妻の入院手術という二重のトラブルがあり、他の生産者より10日以上も遅れてしまいました。(コラム35: 古い 参照) その後すべての作業が後手に回ることになったので、今年は秋の定植に向かって早くから準備をしてきました。



イチゴの栽培は、6月の半ばに収穫が終わった時から準備が始まります。十分に灌水による栽培棚の肥料落とし、終了株の除去、1週間ハウスを閉めて太陽熱による土壌消毒、栽培棚への土増し作業、土壌検査、6種類の肥料の散布と攪拌などです。そしてこの頃に一番コワイのは台風、真夏の暑さの中での作業もシンドイですが、こちらの暴風の対策は真剣かつ悲壮になりますよ。やれることはすべてやり、後はとも

かく直撃だけはしないようにと神頼みするのみですね。そのような困難を何とか乗り越え、やっと苗の定植に辿りつくのです。

定植前にあったJAの土壌検査で PH(酸性ーアルカリ性を示す尺度)は適正だが、EC(塩類濃度)がやや高め、塩基飽和度は232%と極めて高く、CEC(陽イオン交換容量)も高め、カリはかなり不足状態なので十分に施肥が必要、という診断を受けました。イチゴの栽培勉強会で先生から検査の説明を聞いても、典型的な「文系人間」の私には、高校時代の化学の授業のごとく難解で、ほとんど理解不能の状態。あえてわかりやすく人間の体に例えて言えば、高カロリーの食事をとり過ぎて、高血圧、高血糖、高脂肪の状態になっているので、栄養過多の食生活とバランスに要注意、……という状態ではないかと勝手に理解しました。

そういうわけで、今年は定植前の施肥量を、指導に従って6種類から4種類に減らし、全体量も少なくなりました。そして栽培床の土を増量し、高く盛り土をして、苗の植え方も少し工夫して変えてみました。このような新しい試みが、どういう結果を生むかはまだわかりません。植え付け後は、ハウスの排水設備や灌水チューブの取り付け、ランナー苗のポット上げ、さらに動噴による消毒などの作業が続いています。苗の方は今の所(10/25 現在)順調に生育し、昨年より早い段階での収穫が出来るのではないかと期待していますね。



昨年10月のコラム「古い」や今年1月の「65歳 新春雑感」でも書いていましたが、私のハウスの周りの環境は急速に変貌しています。昨年の今ごろは工事中で、土が掘り返されて大変な状況でしたが、今は道路工事は終了し、16件の家が建てられ、一部を省いて入居済み状態です。イヌの散歩の時に歩いてみると、大抵は30代位の若い夫婦で、子供二人で車2台というのが、平均的な家庭のようです。少子高齢化の進む昨今、街の人口が増え、若い人が多くなるというのは歓迎すべきことだと思いますが、農業をやっていく上では問題がありそうです。



ビニールハウスの側に家が建つということは、まず日照の問題がでてきます。井戸水の今後の出方も心配です。あとは草刈り機やごみの焼却なども気を使いますね。近くで稲作をしている同級生のM氏と最近話したのですが、彼はもうここでは農業は出来んというのです。「ワシは百姓が好きじゃけえ、やりたいんじゃが、税金が今年4倍になったんよう。稲を作っても採算が合わんけえ、手放すしかないよのう。市の者は地産地消とか口では言うても、家が建って人が増えて、市に税金がエツと入る方がエエんじゃろうけえのう」私は全く同感、黙ってうなづくしかありません。彼がやめたら、今回の新しい道路の内側のブロックで、農業をやっているのは私だけになります。

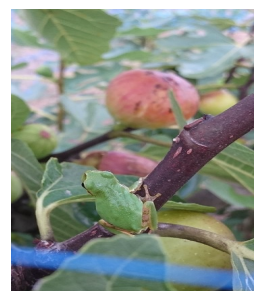


少し前ハウスの中で仕事をしていると、コオロギを見つけました。動きがニブイので簡単に捕まえ、外に放そうとして手の中を見ると、何かおかしいことに気づきました。後ろの足が片方なかったのです。歩くことは出来ても飛べないのですよ。＜どうしてこんなことになったんかのう？＞ そう思った時、私はあることを思い出しました。前日にハウス内の灌水バルブの取り換え工事をしたのです。その時に誤って踏んずけてしまったのかもしれませんが。コイツは水を求めてこの中に迷い込んでいたのでしょう。私はこの「身障者」をハウスの外に放そうとして、そこが除草剤を散布したばかりと気が付き、少し離れた空き地まで行って逃がしてやりました。＜コイツはもう生きて行けんじゃろうのう＞と思いつつ……

片足の コオロギ放つ 枯野かな

新しい家が建ち、田んぼがなくなり、放置された住宅予定の空き地が増えたことで、家の近くの生態系も確実に変化してきています。私の家の側の古池に毎年姿を見せてくれていたイモリが、ほとんどいなくなりました。田植の時期になっても水が溜まらなくなったためです。この辺では最後の自生地だったと思うのですが、この変化は寂しいですね。沢山歩き回っていた緑色のアマガエルも少なくなりました。今年は上記の「彼の田んぼ」があったから、時々見かけましたが、もう来年はわかりませんね。ハウスの側に打ち込んでいる金属パイプの中から顔を出しているのを見かけましたが、あれはそこしか水が溜まっている場所がなかったからで、最後の居場所なのかもしれません。夏場にはイチジクの葉の中で元氣そうにしていますがね。

アマガエル パイプの中は 仮の宿



夏の終わりの頃、我が家の敷地のなかに居ついている「最後の住人」が、その見事な姿をみせました。時折年に何度か、忘れた頃に姿を見せる「シマヘビ」クンです。私がシンビの水やりをしている時に、株の葉の上に体をもたせるようにしているのです。体長は1mをゆうに超え、艶のある見事な姿態です。私は変えたばかりのスマホで写真を何枚か撮りました。いつもはすぐに逃げ出して写真など撮れないのですが、その時は、ジッと動かないでいてくれました。

それはあたかも<ワシの姿を記念に撮っておいてくれよ>と言っているかのようです。撮り終わると、かれは美しい体をスルスルとクネらせて、近くの石垣の中に消えてゆきました。その後再びその姿を見る事はありません。 <もしかしたら、あれは最後のお別れに出てきてくれたんじゃないか> 私はそんなことを思いました。来年はこの場所にも家が建つ予定ですし、好物のカエルもいなくなるでしょう。彼の居場所はもうなくなってしまうのですから……

夏過ぎて 輝く肢体の かれ思う

考えてみると、蛇というのは悲しい運命を背負った生物ですね。その姿ゆえに、何の悪事を働くわけでもないのに、人に嫌われ、恐れられ、攻撃され、追われるのです。もっともそんなことは人間の身勝手な感覚であって、彼にとってはどうでもいいことなのかもしれません。そうは言っても、ヒトが自分たちの都合で彼らの生きていく環境を奪っている、ということだけは確かですよね。



除草剤の散布という作業を時々します。土地を十分に有効活用していれば、草ボウボウにはならないのですが、そこまで手が回りません。手作業での草むしりではとても追いつかないので、除草剤の散布をして、枯れた後に草刈り機での刈込、という作業をやることになります。草の根を枯らしているのではばらくは持ちますし、土壌が変質するわけではないので、野菜の栽培には影響がありません。夏場は2か月したら草が伸びてしまいますから、年に4-5回はやることになりますね。

最近はこの作業に「罪悪感」を覚えるのです。草を根こそぎ枯らすということ→虫を殺すこと、もしくは居場所を奪うこと→カエルやコオロギの食物をなくすこと→小鳥や蛇がいなくなること……そういう「食物連鎖の構図」が頭に浮かぶのですよ。彼らと共存するには除草剤の散布をやめるべきだとわかっているのです。同様に、車を運転することが、環境の汚染と地球の温暖化に結びつき、やがては自分たちの生存を脅かす、ということもわかっているのです。小鳥やカエルが鳴くような環境で生活したいと願っているにもかかわらず、その行為を止めることが出来ないのですよ。ある日、いつものように仕事をしながらラジオを聞き流していると、ドキリとするような川柳が耳に入ってきました。 <人間は 星一番の 問題児>

「百姓をヤルのも、ヤネコイことがエツとあるんじゃが、他の生き物と仲ようヤルいうのもイタシイことよ。ヒトがソガイに悪いヤツとは思いたい(う)」